

## 茂吉のニーチェ受容：「古代芸術の讚」を視座に

前田, 知津子  
福岡工業大学：非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/1456043>

---

出版情報：Comparatio. 17, pp.13-23, 2013-12-28. 九州大学大学院比較社会文化学府比較文化研究会  
バージョン：  
権利関係：

## 茂吉のニーチェ受容

——「古代芸術の讚」を視座に——

前田知津子

はじめに

昭和二十一年一月号の「アララギ」に掲載された「古代芸術の讚」(「童馬山房夜話」一二三)は、著者自身その第二段落で述べているようにニーチェの『偶像の黄昏』を踏まえて書かれている。その中のどの章に依拠したかについては、昭和四一年七月に発表された氷上英広の論文「斎藤茂吉とニーチェ——日本におけるニーチェ影響史への一寄与として——」(「比較文学研究」第一一号)(注1)に、「私が古人に負うところのもの」であることが示されている。

「古代芸術の讚」は、茂吉のニーチェ受容を知るうえで注目すべき資料であり、また本稿における論点がほぼ全体におよぶため、やや長くなるが次に全文を引用する。引用は初出誌による。

この夜話で、ウインケルマンの話をし、ウインケルマンが古代芸術(主として希臘彫刻)について讚美し、『貴き簡素と静かなる偉大』を以てその特徴としたことを話したのであった。ウインケルマンのこの話は有名であるのみならず、眞実にして正鵠を得たものであった。

然るにフリードリヒ・ニーチェの偶像の黄昏を読むと、希

臘の芸術の中から、静かなる偉大(Ruhe in der Grösse)や、高貴な簡素(hohe Einfalt)などを抽出してその特徴とし讚美するのは鈍いことであるとし、又ソクラテス一派の哲学といふものは、畢竟希臘の本能の類廃デアケレシスに過ぎない、さうしてトウキデイデスの如き者が即ち希臘の本能の代表者であつて、厳しい強い現実主義者の総和とも謂ふべく、彼は現実把握に勇猛であり、多力に向ふ意志の体得者である。それに較ぶる時はプラトウの如きは理想主義へと逃げ去つた、現実の回避者に過ぎぬものである、とした。

さうしてニーチェは、あふれ流るる希臘の本能から、ディオニソスの名を以て呼ばれ得べき驚くべき現象を見た。そしてこの現象は力の過剰(Zuviel von Kraft)といふことを以てはじめて説明し得べきものだとした。

なほニーチェは云つた。ディオニソスの神秘、ディオニソスの状態の心理に於てのみ、希臘の本能の根本事実が表白せられる。「多力にむかふ意志」が表白せられる。さうして「生にむかふ意志」、「永遠の生」、「生の永遠回帰」が保証せられる。生への勝ち誇れる肯定である。生殖による、性欲的神秘による総体的生存としての眞実の生である。即ち産婦の陣痛は生への永遠意志の象徴である。悲劇の誕生はここにその根源を求め得べく、それは、あふれ流るる生及び力の感情としての機能亢進(Orgeasmus)として洞察すべきものである。

この発明に較ぶれば、ウインケルマンも、ゲエテも希臘芸術の眞の理会者ではなかつた。ウインケルマン等の考察した

ものは別個のものであつて、ディオニゾスの芸術の根源要素、即ち生にむかふ意志による機能亢進とは両立せざるものである。かうニイチエは云つた。

ニイチエの説くところは右のごとくである。自分の如き程度にあつて希臘芸文に接するものは、この二つとも受け納れることが出来る。さうして二つとも念中に持つて古代希臘にあひ対することが出来る。さうしてホラアツの短詩にあひ対したとき、また、ラオコーン群像にあひ対したとき、混乱することなく、これ等の先輩の語をおもひ出すことが出来る。

併し若しこの眼前のきびしい代にあつて、幸に生を保つことが出来るならば、或は二家の説以外に眼力が発展せぬとも限らぬのである。(昭和二十年一月二十三日夜話) (注2)

茂吉はこの文章において、ヴィンケルマンとニーチェの古代ギリシア芸術に対する見解を紹介している。全六段落からなる文章の概略を押さえておくと、第一段落では、ヴィンケルマンの芸術観について述べ(注3)、第二段落から第五段落においては、ゲーテやヴィンケルマンの古代ギリシア理解は本質を見誤っているとしたニーチェの見解を要約している。最終段落ではそれに対する自説を述べている。

文章を読むと、「静かなる偉大 (Ruhe in der Grösse)」「高貴な簡素 (hohe Einfalt)」「力の過剰 (Zuviel von Kraft)」「機能亢進 (Orgasmus)」などのようにドイツ語の補入があることや「類廃」に「チカダンス」と読み仮名が振られていることに気づく。これらドイツ語の併記やルビの使用は、茂吉が原文を参照したこ

とを裏付けるものである。茂吉の文章と、もとなつたニーチェのドイツ語原文とを照らし合わせてみると、あきらかに異なる箇所が認められ、これを検討することは、茂吉のニーチェ受容のあり方を知るための有益な方法であると考えられる。

本稿では、これまでほとんど注目されることのなかった「古代芸術の讚」を、ドイツ語原文及び生田長江訳と比較検討し、茂吉晩年におけるニーチェ受容を明らかにする。

## 一 茂吉文とドイツ語原文及び生田長江訳との対照

### 1 保存された「多力にむかふ意志」

再度の引用になるが、考察の便宜のために改めて問題とする箇所を粹でかこみ掲出する。次に引くのは第四段落前半部分である。

なほニイチエは云つた。ディオニゾスの神秘、ディオニゾスの状態の心理に於てのみ、希臘的本能の根本事実が表白せられる。「多力にむかふ意志」が表白せられる。さうして、

「生にむかふ意志」、「永遠の生」、「生の永遠回帰」が保証せられる。生への勝ち誇れる肯定である。

右の箇所該当するドイツ語原文は次のとおりである。日本語訳を、ちくま学芸文庫版ニーチェ全集(以下、ちくま版と略記)によつて付す。

Folglich verstand Goethe die Griechen  
en nicht. Denn erst in den dionysischen Mysterien, in  
der Psychologie des dionysischen Zustands spricht sich

die Gr undthatsache des hellenischen Instinkts aus — sein **„Wille zum Leben“**. Was verbrügte sich der Hellene mit diesen Mysterien? **Das ewige Leben**, die ewige Wiederkehr des Lebens; die Zukunft in der Vergangenheit verheissen und geweiht; das triumphirende Ja zum Leben über Tod und Wandel hinaus; das wahre Leben als das Gesamt-Fortleben durch die Zeugung, durch die Mysterien der Geschlechtlichkeit.

(ちくま版訳) したがって、ゲエテはギリシア人を理解しなかつた。なぜなら、ディオニソスの密儀のうちで、ディオニソスの状態の心理のうちではじめて、古代ギリシアの本能の根、本、事、実、は——その「生への意志」は、おのれをつつまず語るからである。何を古代ギリシア人はこれらの密儀でもつておのれに保証したのであるか? **永遠**の「生」であり、**生の永遠回帰**である。過去において約束され清められた未来である。死と転変を越えた生への勝ちほこれる肯定である。生殖による、性の密儀による総体的永生としての真の生である。

まず、「多力にむかふ意志」(茂吉)に注目したい。この語は Wille zur Macht の茂吉訳である。しかし、原文の当該箇所はこの語句はない。その箇所にあるのは、Wille zum Leben であり、「生への意志」(ちくま版訳)、「生にむかふ意志」(茂吉)と訳されるべき語である。つまり茂吉は、原文にない語を訳出したことになる。問題はそれにとどまらない。つづく文章を見よう。原文に忠実な

ちくま版にしたがえば、ディオニソスの密儀が保証するのは、「永遠の生」「生の永遠回帰」である。しかし茂吉文では、「生にむかふ意志」、「永遠の生」、「生の永遠回帰」となっている。原文とくらべると、「生にむかふ意志」の語が余計なのである。茂吉の語句の配置は、本来「生にむかふ意志」の語があるべき箇所に「多力にむかふ意志」の語を入れたために、「生にむかふ意志」が押し出され不適切な位置に押し込まれた、と見えるのである。なぜこのようなことになったのか。

「古代芸術の讀」執筆時に、茂吉が参照可能だった『偶像の黄昏』の日本語訳には、生田長江訳(大正一五年一月、昭和一〇年八月)(注4)と阿部六郎訳(昭和一七年一月、創元社)がある(邦題はともに「偶像の薄明」)。次に長江訳を引く。(長江訳) 従つて、ゲエテは希臘人を理解しなかつた。なぜと云つて、ディオニソスの神秘の中にのみ、ディオニソス的情態の心理の中にのみ、希臘的本能の根、本、事、実、が、その「**権力への意志**」が表白されてゐるからである。希臘人はそれらの神秘で以て何を自らへ保証したか? **永久の生命**、**生命の永久回帰**である。過去の中に約束され、神聖にされたる未来である。死滅と転変とを超越した、生命への勝ち誇る肯定である。生殖により、性慾の神秘による総体的生存としての真実生命である。

長江も茂吉同様、ドイツ語原文にはない、Wille zur Macht を「権力への意志」として訳出していることが確認できる。ただし、つづく文章の語句(「永久の生命」と「生命の永久回帰」)について

は、茂吉文がドイツ語原文と対応していないのとは違って、原文と対応している。

要点を繰り返すと以下のようになる。茂吉文第四段落に対応するドイツ語原文に、Wille zur Macht はない。原文のその箇所にあるのは、Wille zum Leben である。この Wille zum Leben を、茂吉・長江両者ともに Wille zur Macht として訳している。以上は共通点である。だが、つづく文章の問題の語句については、長江訳が原文に対応しているのに対し、茂吉文は対応していない。

このことから茂吉の文章は、長江訳を参考に作られたとの推測が成り立つ(注5)。無論、一人がそれぞれに原文を読み誤った(Wille zum Leben を Wille zur Macht と読んだ)可能性についても考える必要があるが、それは、つづく文章の語句の不对応によつて高い確率で否定される。ドイツ語原文にあるにもかかわらず長江が訳出しなかった Wille zum Leben を、茂吉が訳し、それを原文とは異なる位置に入れたこと、つまり、茂吉文に見られる「生にむかふ意志」の語の不適切な配置は、まず、長江訳を参考に文章を作り、次に、制作した文章とドイツ語原文とを比較し、それから定稿にみるような補正をおこなったことを意味するからである。

分かりやすくするために、いま問題としている箇所形成過程を考えてみたい。茂吉の文は、まず、次のように考えられたのではないだろうか。仮に移行形と呼ぶ。

(移行形) なほニイチエは云つた。デイオニソスの神秘、デイオニソスの状態の心理に於てのみ、希臘的本能の根本事実

が表白せられる。「多力にむかふ意志」が表白せられる。さうして、「永遠の生」、「生の永遠回帰」が保証せられる。

茂吉は、長江の訳文を見ながらいったん右のような文を作った。それから原文に立ち返った。その際に移行形(それは長江訳でもある)の語句と原文のそれとの不对応に気づいたと思うが、その語句を原文の形に戻そうとはしなかった。「多力にむかふ意志」を残したまま、本来はそれがあるべきではない場所に「生にむかふ意志」を補筆したのである。そう考えられる。

さらに、長江訳を参照した可能性を補強するために、両者に共通する訳語のうち特に目を引くものを二点見ておく。Orgasmus と Horazische Ode である。

#### <Orgasmus>

こゝで見るのは、茂吉文の第四段落後半部分である。

(茂吉文) 即ち産婦の陣痛は生への永遠意志の象徴である。

悲劇の誕生はここにその根源を求め得べく、それは、あふれ流るる生及び力の感情としての 機能亢進 (Orgasmus) として洞察すべきものである。

Die Psychologie des Orgasmus als eines überströmenden Lebens- und Kraftgefühls, innerhalb dessen selbst der Schmerz noch als Stimulans wirkt, gab mir den Schlüssel zum Begriff des t r a g i s c h e n Gefühls, das sowohl von Aristoteles als in Sonderheit von unsern Pessimisten missverstanden worden ist.

(ちくま版訳) 苦痛ですらその内ではなお刺戟剤として作用するところの、溢れでる生命と力の感情としての「酒神密儀」の心理学は、アリストテレスによっても、とりわけ現代のペシミストたちによっても誤解されている悲劇的感情という概念を開く鍵を私にあたえた。

注目すべきは、茂吉が *Orgiasmus* を「機能亢進」と訳していることである。小学館の『独和大辞典』第二版(一九九八年一月)を見ると、*Orgiasmus* は、第一義に「ギリシアの酒神 *Dionysos* の「密儀の酒宴」とあり、第二義に、比喩的表現(転義)として「放縦な酒宴、無礼講、どんちゃん騒ぎ」とある。古代ギリシアの文脈では、普通、「酒神密儀」(ちくま版)、「酒神祭秘儀」(阿部訳)などのように訳される。それを茂吉は「機能亢進」としているのである。長江訳を見てみよう。

(長江訳) 充ち溢れる生命及び力の感情としての、**機能亢進** —— その中では苦痛すらも刺戟として働くのである —— の心理は、アリストテレスからばかりでなく、特に我々の悲観主義者等からも誤解されてあるところの、悲劇的<sup>悲劇的</sup>感情の概念に対する合鍵を私に与へた。

茂吉同様「機能亢進」の語をあてている(注6)。

長江訳『偶像の薄明』が刊行される大正一五年一月以前の独和辞典を調べたところ、九冊に限っていえば、*Orgiasmus* を載せているものはなかった。確認できたのは、①明治二〇年二月発行の増訂『独和辞彙』第三版(風祭甚三郎、後学堂)、②明治二三年五月発行の『独和字書大全』(行徳永孝纂訳、金原寅作)、③明治

三一年一月発行の『袖珍独和新辞林』第五版(高木甚平・保志虎吉編、三省堂)、④明治二八年一〇月発行の『独和辞書』第五版(伊藤誠之堂)、⑤明治三五年二月発行の『新独和辞典』(井上哲次郎、大倉書店)、⑥明治四一年三月発行の『二十世紀独和辞書』七版(藤井信吉編、金港堂)、⑦大正一〇年八月発行の袖珍版『独和辞典』第一五版(有朋堂)、⑧大正一二年四月発行の『新式独和辞典』(登張信一郎、大倉書店)、⑨大正一五年四月発行の縮冊版『新訳独和辞典』(登張信一郎、大倉書店)の九点である。

*Orgiasmus* は不載であるが、①②④⑥は *Orgien*、⑦⑧⑨は *Orgie* の語を載せている。*Orgien* は、*Orgie* の複数形であり、右の辞書類では、例えば「酒宴」「無礼講」「暢飲」「躁宴」などの訳語があてられていた。

このように、長江の翻訳書刊行以前に一般に流布していた辞書類は、関連語の *Orgie* を記載するにとどまる。またそれ以降に刊行された数点(注7)にも、*Orgiasmus* は不載である。専門性の高い用語であることがうかがわれる。

*Orgiasmus* の立項が確認できるのは、茂吉の「古代芸術の讚」発表以後のものであり、昭和三三年六月に発行された相良守峯編 *GRÖßES DEUTSCH-JAPANISCHES WÖRTERBUCH* (博友社) が、早いものようである。同書は、その第一義に「古代ギリシアの *Dionysos* 祭礼における暴飲乱舞」と載せている(注8)。

上述のような状況であるため、茂吉が独自に「機能亢進」の語をあてた可能性はほとんどないと思われる。長江がこの語を「機能亢進」と訳した経緯は措くとして、茂吉に関して言えば、長江

に倣ったと見てよいだろう。

#### 〈Horazische Ode〉

茂吉は Horazische Ode を「ホラアツの短詩」と訳している。現在では、「ホラチウスの一頌歌」（阿部訳）、「ホラティウスの頌歌」（ちくま版訳）が平均的な表記であり訳語であるだろう。

長江訳を見ると、「ホラアツの一の短詩」とあり、茂吉との類似が見て取れる。「ホラアツ」はドイツ語の音を片仮名に写した表記であるため、この表記の一致を根拠に、茂吉が長江訳を参照したと主張するのは説得力に欠けるかもしれない。だが通常、頌歌と訳される Ode を「短詩」と訳している点は注意されてよい。

以上、ここで確認した *Orgasmus* と *Horazische Ode* の訳語の一致は、茂吉が長江訳を参照したことを裏付けるものである。

長江訳を参照し文章を書いたことで、茂吉の文章は原文との間に齟齬を生じた。原文に忠実であろうとする姿勢と、原文にはないが「多力にむかふ意志」の語は保存したいとの思いが、茂吉に定稿にみるような文章を作らせたのであろう。「多力にむかふ意志」に対する茂吉の思い入れがはからずも顕在化してしまった形である。

長江訳に示唆を得ることが多かったにもかかわらず、この訳語に関しては長江訳に倣っていないこともまた、茂吉における「多力にむかふ意志」の重要性を教えている。

## 2 茂吉の *Wille zur Macht* の独自性

茂吉が、長江を参照しつつそれに準じなかった語句のうち、最

も重要なのは、*Wille zur Macht* の訳語である。これを茂吉が「多力にむかふ意志」、長江が「権力への意志」とすることは見てきたとおりである。

茂吉にとつて *Wille zur Macht* は、「多力にむかふ意志」でなければならなかった。なぜそうなのかを述べるためには、茂吉のニーチェへの関心が高まる明治末年から大正初期まで遡る必要がある。茂吉がはじめてこの訳語を公に使ったのは、大正二年三月号の「アララギ」誌上においてであった。

短歌の形式をいとほしむ心は力に慄るる心である。短小なる短歌の形式に紅血を流通せしめんとする努力はまさに障礙に向ふ多力者の意力である。『*多力に向ふ意志*』である。

「多力に向ふ意志」を「*ウイレルツールマハト*」と読ませていることから分かるように、受容のはじめから茂吉はニーチェの *Macht* を「多力」で受けている。そこに、幸田露伴の影響があったことについては以前述べたことがある（「茂吉における「力」——「多力者」についての考察——」、*Comparatio*, Vol. 13, 2009, 12）。いまは、露伴の「*靄護精舎雑筆*」其二十六に、「*忍辱は多力なり*」という一節が見えることを繰り返しておく。

茂吉の「多力」（茂吉もこれをタリキと読む）は、「忍辱」を視野に入れて考えられなければならない。その点に、つまり「忍辱」を前提とする「多力」によってニーチェの力の思想を捉えた点に、茂吉のニーチェ受容の特色はある。この受容期の茂吉は、伊藤左千夫との確執、茂吉の編集方針に対する反発（明治四四年のうちに「アララギ」の編集を担当するようになっていた）、生母

の病、養家での立場のことなど、いくつもの問題を抱えて、みずから「多力者」であることを欲していた。このとき、茂吉を文壇に知らしめることになった『赤光』（第一歌集、大正二年一〇月）はまだ刊行されていない。

ニーチェは、このような茂吉の個人的事情に絡み取られるように受容されたのである（注9）。それゆえに「多力にむかふ意志」の語は、いかなる語とも取り替えることはできず、長江訳にしたがうこともなかった。

書名においても、茂吉は長江と異なる語を使っている。先に述べたように、長江は「偶像の薄明」であり、茂吉は「偶像の黄昏」である。「偶像の黄昏」の語は、すでに大正二年一月に刊行された安倍能成訳『この人を見よ』（南北社）などにおいても用いられていた。「偶像の」との連結を考えたとき、茂吉は「薄明」より「黄昏」の方をよしとしたのだろう。

以上、ここで確認した長江との訳語の相違は、用語の選択や使用に際し、茂吉なりの理論に基づく判断が働いていたことを示している。

「偶像の黄昏」については、『ともしび』に、次のような歌があることを付言しておく。

偶像の黄昏くわんこんなどといふ語も今ぞかなしくおもほゆるかも

（大正一四年）

「黄昏」を「くわうこん」と読ませている。全ての場合でそう読ませたのかは不明であるが、少なくとも右の一首の中では、「くわうこん」でなくてはならなかった。

## 二 『ツアラトウストラ』の文体の模倣、影響歌

「古代芸術の讃」の特徴として、ニーチェの名前が繰り返して使われていることがあげられる。「然るにフリードリヒ・ニーチェの偶像の黄昏を読むと」（第二段落）、「さうしてニーチェは」（第三段落）、「なほニーチェは云つた」（第四段落）、「かうニーチェは云つた」（第五段落）、「ニーチェの説くところは右のごとくである」（第六段落）などのように、各段落の文頭文末でたまたみかけるようにニーチェの名前を用いている。これは、『ツアラトウストラ』において、語り手が「ツアラトウストラはこう言った」と繰り返して言う、その口調を想起させる。前記のニーチェの名前の反復は、茂吉による『ツアラトウストラ』の文体の模倣と見てよいだろう。

また、「古代芸術の讃」の執筆が歌作に及ぼした影響も少なくはない。例えば、敗戦間も無いころの歌に、  
あめつちに陣痛ありとおもほゆるこれの時代よまよに生きむとぞずる  
（昭和二年）

の一首がある（『小園』所収）。これにはニーチェの「私が古人に負うところのもの」の中の次の箇所との関連が見て取れよう。

（ちくま版）生殖による、性の密儀による総体的永生としての真の生である。これゆえにギリシア人にとっては性的象徴は畏敬すべき象徴自体であり、全古代的敬虔心内での本来的な深遠さであった。生殖、受胎、出産のいとなみにおける一

切の個々のものが、最も崇高で最も厳肅な感情を呼びおこした。密儀の教えのうちでは苦痛が神聖に語られている。すなわち、「産婦の陣痛」が苦痛一般を神聖化し、——一切の生成と生長、一切の未来を保証するものが苦痛の条件となっていく……

茂吉はその部分を「生殖による、性欲的神秘による總体的生存としての真実の生である。即ち産婦の陣痛は生への永遠意志の象徴である」と要約している(注10)。

### 三 茂吉の *Orgasmus* 理解

——氷上英広論文の指摘を踏まえて——

先に述べたように、氷上英広は茂吉の「古代芸術の讚」が『偶像の黄昏』中の「私が古人に負うところのもの」に依拠していることを指摘した。同じ論文の中で、茂吉の第四段落末の一文について次のように述べている。

「あふれ流るる生及び力の感情としての機能亢進(*Orgasmus*)として洞察すべきものである」と茂吉が書いているのは、若くおかしいのである。原文にあたってみると、*Orgasmus* という語はなく、あるのは *Orgasmus* であって、茂吉はおそらく読み違えたのであろう。もしもつと前の方から原文を読めば、以前から *orgien* という語がすでに出ていて、それはディオニユソスの祭の秘儀のことであって、機能亢進となるはずがない。ディオニユソス芸術はディオニユソスの祭から発生して

くるのであり、ディオニユソスの祭の過剰を意味し、またある意味では「生にむかふ意志による機能亢進」のようなものも含まないとはいえないかもしれないが、さらにそのさきを読んでも、*Psychologie des Orgasmus* (XV, 173) というのは、たんなる機能亢進の心理学ではなく、ディオニユソス祭秘儀の心理学であって、それがいまままで誤解されてきたギリシヤ的な悲劇感情の概念をひらく鍵をあたえるのでなければならぬ。茂吉の読み方は大筋を間違えてはいないけれども、決して精密であるとは言えないのである。

氷上は、茂吉の文章の「機能亢進 (*Orgasmus*)」の箇所に注目し、原文に「あるのは *Orgasmus* であって、茂吉はおそらく読み違えたのであろう」と、その「読み違い」に言及している。

このことに関してまず確認しておきたいのは、氷上が参照したのは、旧版の全集(第一三巻、昭和二八年九月年、岩波書店)であったという点である。その中では、確かに氷上が確認したように「機能亢進 (*Orgasmus*)」となっている。しかし冒頭に掲出した全文にあるように、初出誌には「機能亢進 (*Orgasmus*)」とあり、綴り字はドイツ語原文のとおりであった。昭和二一年一〇月刊行の単行本『童馬山房夜話 第四』(八雲書店)には、初出形が正しく転載されていることから、その後の全集編纂時に、i の脱落した *Orgasmus* となってしまったと思われる。茂吉全集は二度刊行され新旧の版があり、この箇所は新版でも訂正されていない。つまり、茂吉は「読み違い」でなく *Orgasmus* と分かつて「機能亢進」としていたのである。

ただ、右の文から分かるように、氷上の主張は、「機能亢進」という語がこの文脈では適切ではないという点にあり、それは、茂吉が正しくOrigenusと認識していたことが分かったとしても変わらず残る問題である。茂吉はなぜOrigenusを「機能亢進」としたのだろうか。それは先に考察したように、長江訳に倣ったためである。そこには適切な訳語を知らなかったという問題もあつたかもしれない。しかしそれは表面的なことに過ぎない。ここで問うのは、もつと本質的なことである。おそらく、茂吉は「機能亢進」の語が文脈に添うと判断したのである。

氷上は「機能亢進」の語を否定しながら、その語を用いた茂吉の心意を分析している。その結果、「ディオニュソス芸術はディオニュソスの祭から発生してくるのであり、ディオニュソスの意ものが力の過剰を意味し、またある意味では「生にむかふ意志による機能亢進」のようなものも含まないとはいえないかもしれないが、「という考えに至っている。氷上の言うように、「決して精密であるとは言えない」としても、まさに茂吉はそのように考えたのではないだろうか。

茂吉のニーチェ受容は、ニーチェのテクストを可能な限りニーチェの文意にそつて理解するというよりは、先に触れたように、自身が晒されている状況に規定される側面が大きかつたように思われる。そのとき欲している要素が極端に拡大されて受容されてしまうのである。

おわりに

本稿では、茂吉晩年の執筆になる「古代芸術の讚」をニーチェ「私が古人に負うところのもの」のドイツ語原文及び生田長江の翻訳と対照しつつ、茂吉のニーチェ受容のあり方を検討し、受容の初期にすでに使用されていた「多力にむかふ意志」が、晩年においても茂吉にとって重要な語であり思想であつたことを確認した。現在の地点から眺めると、「多力にむかふ意志」は茂吉の生涯を貫いているかのようなものである。また、『ツアラトウストラ』の文体の模倣が試みられていること及び短歌作品への影響があることを指摘した。

#### 〔付記〕

一、茂吉作品の引用は、「古代芸術の讚」を除いては、『斎藤茂吉全集』（全三六巻、昭和四八―五一年、岩波書店）によつた。

一、ニーチェ作品の引用は、Nietzsche's Werke, Taschen-Ausgabe, Bd. 10, C. G. Naumann (1906) によつた。

一、引用文中の囲線は引用者が付し、引用文中の文字は適宜通用の字体に改めた。圏点は原文のとおり。

一、ちくま版『偶像の黄昏』（原佑 訳）は、二〇〇八年五月第七刷を使用した。

#### 〔注〕

〔注一〕後に、日本文学研究資料刊行会編『斎藤茂吉』（昭和五五

年九月、有精堂)、氷上英広『大いなる正午』(昭和五四年一月、筑摩書房)、『ニーチェとの対話』(一九八八年二月、岩波書店)に所収。

れる。

(注3) 昭和十四年二月号の「童馬山房夜話」に、「真淵とウインケルマン」という文章を書いている。

(注2) 同文の末尾には、初出誌、単行本ともに「昭和二十年一月二十三日夜話」と明記されている。全集は新旧版ともに「一月二十三日夜話」とのみ記す。初出にしたがえば、昭和二〇年一月に執筆したものを、翌二十一年一月号に発表したことになり、ここに約一年の隔たりがある。当時の社会情勢にあつては起こり得ることだろう。昭和十九年二月の「アララギ」の「編輯所便」で土屋文明は「用紙量のため又々十一月号より減頁になつて居る。従つて会員の作品は誌上に掲載の場合は益々少くなる。(略)尚十一月号がひどく遅れたので、本号も又少し遅れるかと思ふ。その中にか対策を講じたい」と雑誌編集の困難な状況を訴えている。この号を最後にアララギは会員にも予告なしに休刊する。敗戦をまたいで復刊にこぎつけた昭和二〇年九月号の「アララギ」は全体で一六頁である。おもて表紙に目次が印字されている(表紙のないつくり、というべきか)。この号に掲載された「休刊中の報告」によつて、一九年一月二月号が二〇年三月に発送されて、その後この九月号にいたるまで休刊を余儀なくされていたことが分かる。九月号も遅れて刊行されている。その経緯は三枝昂之『昭和短歌の精神史』(平成一七年七月、本阿弥書店)に詳しい。この事情のために、昭和二〇年一月に書かれた文章は、使われないうちに復刊を待つことになったと思われ

(注4) 長江は二度の全集訳を果たしている。『ニイチエ全集』(一九一六―一九二九年、新潮社)、『新訳決定版 ニイチエ全集』(一九三五―三六年、日本評論社)。

(注5) 茂吉が「多力にむかふ意志」を当該箇所位置いたしたのは、長江訳の影響として説明できるが、長江がなぜそう訳したのかは分からない。

(注6) *Orgrasmus* の語は、この箇所のほか、もう一箇所確認できる。この第二の箇所も茂吉・長江ともに「機能充進」とする。

(注7) 昭和二年七月初版発行の『双解独和大辞典』(片山正雄、南江堂)。昭和三年一〇月発行の『最新独和大辞典』第六版(権田保之助編著、有朋堂)。昭和四年一〇月発行の『双解独和小辞典』(片山正雄、南江堂)。昭和一〇年四月発行の『標準独和辞典』(橋本忠夫監修、南江堂)。昭和一一年四月発行の『独和言林』(佐藤通次、白水社)。昭和十二年三月発行の『ゴンドラ独和新辞典』第五版(有朋堂)。

(注8) これ以後の *Orgrasmus* の登載について。昭和三六年三月発行の改新版『独和言林』(佐藤通次、白水社)は載せるが、訳は「底ぬけ騒ぎ」「気違い沙汰」とあるばかりで、小学館や相良が第一義に掲げる意味には及んでいない。昭和三八年一月発行の三省堂編修所編、新訂版『独和新辞典』は載せ、「古代ギリシアの Dionysos (Bacchus) 祭の狂喜乱舞」と記す。昭

和三八年二月発行の新訂版『木村・相良独和辞典』（博友社）に *Orgiasmus* は不載であるが、*Orgiastisch* の項で *Orgie* を扱  
い、「*Dionysos* 又は *Bacchus* の忘我的な秘密祭」と記す。

（注9）茂吉の「多力にむかふ意志」の語が、訳語として一般性をもち得なかったのは、あまりにも茂吉の個に即したものの、その内奥から選びとられたものであったためであろう。

（注10）茂吉の「産婦の陣痛」に対応する長江の訳語は「産婦の苦しみ」（大正一五年一月、新潮社）。